

パネル「乳用牛の飼育過程（ホルスタインの場合）」の解説

家畜の繁殖について

畜産でもっとも基本的で大切なことは、何でしょうか。

それは、どの畜種でも大切なことです。

答えは、家畜に健康でよい子をたくさん産んでもらうことです。畜産では、「繁殖」という言葉を使います。

繁殖は、家畜によって違いがあります。

それは1年中いつでも子を産むことができる動物と、季節によって子を産む動物がいるということです。

身近な家畜には、牛、豚、馬、ニワトリなどがいますが、繁殖のようすは動物によって異なります。

哺乳類の家畜の雌は、妊娠できる体の準備が整い、雄を受け入れられる状態とそれを雄に知らせる状態、これを「発情」と言いますが、この時だけ、雄を受け入れます。

牛や豚は、妊娠していない時は、1年中周期的に発情を繰り返します。つまり年中いつでも妊娠することが可能な家畜です。

一方、馬やヒツジ、ヤギは特定の季節だけに発情します。馬の妊娠期間は、約340日、ヒツジやヤギは約150日です。いずれも子が産まれる季節が春になるように、馬では春に、ヒツジやヤギは秋に繁殖期を迎えるようになっています。

少し見方を変えてみると、いつでも子どもを産める牛や豚は、畜産業に向いているとも言えるでしょう。

子牛の分娩

日本の酪農経営での乳牛の分娩は、ほとんどが人工授精によって繁殖が行われています。

母牛は人工授精の後、約280日の妊娠期間を経て子牛を分娩します。分娩は30分～40分で終了し、生まれた子牛は30分も経たないうちにひとりで立ち上がろうとします。

哺育

生まれた子牛は、子牛専用の飼育場所(カーフハッチという専門の小屋の場合もある)で、母牛とは隔離されて飼育されます。

分娩直後の母牛の乳は「初乳」と呼ばれ、免疫効果もある大切なものです。乳は人間の哺乳瓶と同じような形をした容器など専用の容器で与えられます。

雌牛から出る乳を搾ることが酪農経営の仕事ですから、雄子牛は経営内では飼育されません。(乳肉一貫経営という経営形態もありますが、これは酪農専業経営とは区別されます。)雄子牛は、概ね1ヶ月ほど飼育された後に、肉用として飼育されるために出荷されます。

雌子牛は、次の世代の母牛として自分の牧場に残す場合と、その必要がない場合は出荷される場合に区分されます。

育成

子牛は生後 2 ヶ月齢程度で離乳されます。

その後、生後 13 ヶ月齢～16 ヶ月齢で初めての種付けをし、分娩するまでの牛を育成牛と呼びます。

この期間は健康な母牛になるための重要な期間であるため、共同の牧場（育成牧場）でまとめて飼育される場合もあります。育成牛の飼育は健康管理などに手間がかかるので、専門の牧場に預けることで農家の労働を軽くすることにもなります。

こうして飼育された育成牛は、生後 23 ヶ月齢～26 ヶ月齢で初めての分娩を迎えます。

以上は、自分の農場で子牛が生まれ、その子牛を母牛にするまでの過程ですが、北海道などで育てられた育成牛を購入する場合があります。

この場合は、購入する前に種付けが終了し妊娠が確認された牛を購入することになります。こうして導入された牛は導入後 1 ヶ月程度で分娩します。

搾乳

分娩した雌牛は、乳を出すようになります。（雌牛でも分娩しないと乳は出ません。）

1 回の分娩当たりで搾乳（乳を搾る）できる期間は、280 日～360 日間です。この間は毎日搾乳できますが、期間を通じて毎日同じ量の乳が出るわけではありません。搾り始めてから、2～3 ヶ月頃がもっとも多く乳を搾れる期間になり、その後は順次減っていきます。

また、産歴によっても期間内の総乳量は異なります。一般的には初産の場合が一番少なく、4 産目 5 産目までは総乳量が増えていきます。これは 1 分娩毎に母牛の体重が増え大きくなることもその要因のひとつです。5 産目以降は、総乳量は減少傾向に向かいます。

1 日当たりで搾れる乳の量は、平均すれば 30kg 程度ですが、多い時期には 40kg もの乳量になります。

種付

上記のように搾乳期間は、平均すれば 300 日前後の期間ですが、この期間を過ぎてから、次の分娩に向けて種付けをしていては、乳を搾れない期間が長くなり効率的ではありません。

このことから、分娩後 40 日程度で次の分娩のための種付けをすることになります。

乾乳

搾乳を始めてから 300 日前後が過ぎてくると、毎日搾れる乳の量も減ってきます。

次の分娩のためにも搾乳を中止して 60 日程度は乳を搾らないようにします。これを

乾乳（かんにゅう）といい、乾乳中の牛を乾乳牛と呼びます。

こうして次の分娩に備えます。

分娩 搾乳開始 種付 乾乳（搾乳終了） 次回の分娩というこの周期は、12 ヶ月間から 15 ヶ月間で繰り返されます。

牛本来の平均寿命は 12 年程度ですが、産業動物として効率よく乳を生産するためには、年齢の高い牛を飼育することは、有益ではありません。

このことから、上記のサイクルを 5 回程度繰り返し約 5 年～6 年程度で搾乳牛としての役割を終えます。

* パネル内、文中の数値等は平均的なものであり、飼育方法等により異なります。